

夫は都立駒込病院で、定期健診を受けた際に、バーキットリンパ腫が見つかり、入院、治療を受けることが出来ました。そして、今日、6 サイクルの治療がすべて終わって、退院することができました。検査入院から数えて、合計125日の長きに渡る入院生活でした。

主治医の S 先生、担当医の O 先生、担当医の T 先生がお揃いで挨拶に来て下さいました。ニコニコ笑顔でしたけれどもとても慎重な雰囲気が漂っていました。



「非常に厳しい治療によく耐えましたね。今後は外来で経過観察し、様子を見ながら、2 か月後の PET 検査(陽電子放射断層撮影)の結果を待ちましょう。」とおっしゃって下さいました。

明確な診断、適切な治療を熱心にして下さったドクター、親切で細心の注意を払ってお世話して下さいましたナースの皆様、心からの感謝の言葉を申し上げます。一番辛い時に優しく励まして下さった若い研修医の N 先生は 12 月に墨東病院に移られたので、写真を撮ることが出来ず残念です。ドクター達は毎日病床を訪ねて下さり、血液検査結果を教えてください、経過について説明され、なにか、疑問や質問がありませんかと、ていねいにコミュニケーションを取って下さり、大切に守られました。

主治医の S 先生は治療を始める前に、「今は人生 100 年の時代、77 歳はまだ若いです。頑張ってお治療をしましょう」と言われました。私たちは「よろしくお願い致します」とお頼みしました。すると先生は「祈る思いで始めます」と言われました。先生は医療にベストを尽くされるだけでなく、神に祈りながら治療をして下さるのだと、その時は気付きませんでした。むしろ、最悪のパターンをすぐに考えてしまいがちな私は、思わず、「遺書を書いておきなさいということですね」と申し上げました。本当に失礼なことを言ってしまったと思います。それほど私は不安が強かったのでしょうか。先生は、毅然とされていても、目をしっかりと合わせて、丁寧に話され、とても頼もしかったです。

担当医の O 先生は関西弁でした。関西弁の響きは距離感を感じさせない、温かみがあります。先生は休みを返上して、病院に詰めておられ、親切で、朗らかなドクターでした。現在、医師の勤務時間があまりに長時間になっていて、健康面でも問題があると指摘されています。ハードワークだと、つくづく感じさせられます。T 先生は 1 月中旬から担当医になって下さいましたが、いつも S 先生と一緒に来られ、先生の言葉を聞き、患者の様子をじっと観察しておられ、ほとんどお話しすることがありませんでしたが、研修医として、チームプレイで取り組んで下さいました。

退院といっても、まだ完治したと言うわけではなく、いわば、入学試験を受けて、合格発表を待っている感じに似ています。夫は、全力を出して、課題に取り組み、闘いぬいた達成感があったことでしょう。とても爽快な気分が退院することが出来ました。それには、私たちに関わって下さった皆様の祈りに支えられたからにほかありません。

神は、これほど大きな死の危険からわたしたちを救って下さったし、また救って下さることでしょう。これからも救って下さるにちがいないと、わたしたちは神に希望をかけています。あなたがたも祈りで援助してください。そうすれば、多くの人のお陰でわたしたちに与えられた恵みについて、多くの人々がわたしたちのために感謝をささげてくれるようになるのです。(II コリント 1:10)

神様の導きに委ねて過ごしてきましたが、大きな喜びと感謝は教会の皆様が夫の回復を祈って下さっていること、折に触れて慰め、励ましの言葉を下さることでした。私は逐一夫に伝えました。夫は「自分がこんなに愛されているとは！」と、涙ぐみながら感謝しておりました。それだけではなく、私の健康までも気遣って下さる教会の皆様、多くの友人、知人の方々、また親族、家族になんとお礼を申したいいでしょうか。心から感謝しています。